

道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会
 事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
 北海道開拓記念館内
 電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

平成14年度ミュージアム・マネージメント 研修会(富良野市)から

本年度のミュージアム・マネージメント研修会は、道北地区博物館等連絡協議会の主催で平成14年10月24、25日の両日、「博物館とエコ・ツーリズム」をテーマに富良野文化会館などを会場に開催された。参加者は63名であった。

10月24日(木)

基調講演「北海道とヨーロッパのエコツーリズム」(講師:エコネットワーク代表 小川 巖氏)

野生生物学、生態環境論等をもとに自然を生かした地域づくりや、環境コーディネートにと幅広い活動を続けておられる小川氏から、オーストラリアのエコツウリストの傾向にはじまり、エコツアーを進める視点、エコウォーキングを広めるにあたっての問題点、オーストラリア、スリランカ、コスタリカ、イギリス、北海道でのエコツアーの例をスライドを交えて紹介していただいた。エコツアーを進める視点では、①フィールドが適正か、②ツウリストの特性を把握しているか、③一般人に魅力のあるプログラムか、の3点が重要であること、また、10年ほど関わっているエコウォーキングの問題点として、道内ではウォーキングに適した道(フットパス)が未整備の状態、イギリス国民が長い時間をかけて造り上げた文化であるフットパスを、北海道でも近隣の市町村が連携して作り上げていくことがエコツーリズムの原点として重要である点を指摘された。

事例報告Ⅰ「エコミュージアムセンターの目指すもの」(中川町エコミュージアムセンター主任研究員 足田吉織氏)

「アンモナイトの町」、クピナガリュウの発見で知られ、町の85%が森林(針広混交林)に囲まれた自然環境にある中川町で、平成9年から化石

の里推進室研究員を振り出しに同町のエコミュージアムセンターづくりに奔走されてきた立場から、平成11年にスタートした中川エコミュージアム構想の経過、活動についての報告であった。

この構想は、旧中川町郷土資料館が中心になって進めてきた地域の自然、生活文化の調査研究が基礎になり、14年7月には構想の核になる中川町エコミュージアムセンターが開館した。廃校となった旧佐久中学校を全面改装した施設で、①学術情報発信の場、②学びと交流の場、③地域住民のまちづくりの場をめざしている。同町では、地域住民がさまざまな立場で「中川エコミュージアム」に参加し、エコツーリズムの受入れにはインタープリターとして大きな役割を果たしている。

今後、エコミュージアムを展開していく上で、地域の自然、歴史、生活などの地域特性を住民自らが調査・研究し、日常から地域の魅力を新発見・再発見、創造すること(「地域の魅力づくり」と、それらを次世代や地域外の人びとに継承・普及し、よりよい状態で保全していくこと(「住民一人ひとりが学芸員」)が課題であり、地域をまるごと博物館とみなして、住民主体で創りあげていくエコミュージアムは、博物館活動を活かした「まちづくり」である点を強調されていた。

事例報告Ⅱ「富良野のエコツーリズム構想について」(アルパインビジターセンター長 小倉博昭氏)

小倉氏は、平成7年、富良野のアルパイン計画に入社以来、熱気球、カヌー、フィッシング、トレッキングなどのネイチャーガイド、同10年には富良野スキー場のある北の峰地区に設立したアルパインビジターセンターのセンター長、14年には美瑛町の白金温泉にネイチャークラブを設立、北海道の自然を生かしたエコツアーの企画運営に幅広い活動をされている。新しい観光のスタイルとして注目されているエコツーリズムの概念、そ

のメリットとデメリットを紹介した後、エコツアーの具体的な手段のひとつ（商品）であるエコツアーについて、「小人数制で、ゆっくり、のんびり、自然に対する影響を出来るだけ抑えながら十分に自然を堪能し、さらにその地域に生活する人や文化との触れ合いを楽しもう！」と分かりやすく説明された。その上で、大雪山十勝岳連峰の山麓にひろがる豊かな自然（景観、野生生物、森）と、それを基盤に成り立つ人の営みを視野においた富良野らしいエコツアーの具体的な企画案を示された。

基調講演、事例報告を受け、旭川市博物館の鈴木紘一館長がコーディネーターとなり、研究協議が持たれた。

10月25日（金）

現地研修Ⅰ 富良野市博物館見学

（展示説明 館長 杉浦重信氏、学芸員 澤田健、石黒 誠氏）

元の市立農業高校の校舎を利用して整備された富良野市生涯学習センターの一施設として、平成14年9月に富良野市街の東、約15^分の山部東21線12に開館した。ふらの森の教室、山部公民館、多目的アリーナと同居している。

1、2階の一部を利用した常設展示室は、富良野市の自然や歴史、民俗、文化に関する資料を、「富良野の人・自然・歴史」をテーマに、1～8のコーナーに分けて展示している。

このほか、1階には体験学習室がある。

富良野市には、昭和43年に郷土館が設置されており、以後この郷土館の地道な活動の実績がこの施設につながっていることが実感される。また、旧校舎を活用した郷土博物館は道内にもいくつかあるが、この博物館もその一つの例として参考になる点が多い。

現地研修Ⅱ 東京大学北海道演習林巡検、同麓郷森林資料館見学（現地案内・説明 東京大学北海道演習林長 大橋邦夫氏ほか）



富良野市博物館展示室

明治32年(1899)に、当時の北海道庁から約24,000^{ヘクタール}の原生林の移管を受けて東京帝国大学農科大学試験地として設立され、農学部林学科の学生実習と北方天然林施業の技術に関する試験研究を行ってきた。空知川最上流部の、標高190～1,460mに位置している。現在の森林面積は22,758^{ヘクタール}で、典型的な針広混交の天然林が80.5%を占めている。設立100周年を経た平成12年度に大学院農学生命科学研究科附属演習林に所属替えになっている。昭和33年に、元演習林長の故高橋延清教授によって「林分施業法」が提唱され、以後この方法を中心にすえた天然林施業技術の研究を進展させてきた。

延長930^{メートル}に及ぶという演習林内の林道の一部を通るため、市博物館からはマイクロバス二台に分乗、環境保全機能と木材生産機能の両立を持続させることを目的とする林分施業法と、林分区分（択伐林分、補植林分、皆伐林分）、施業方針について分かりやすく説明いただいた。

その後、同演習林が管理する麓郷森林資料館を見学した。

今回の研修会は、富良野市博物館の開館に合わせて開催されたもので、「博物館とエコ・ツーリズム」の研修テーマも全国的に知られる観光地である富良野市に即したものであったと思われる。エコツーリズムへの関心が高まっているとは言え、定められた観光コースをめぐるマスツーリズムが中心の日本では、エコツーリズムを受け入れる基盤は弱く、その普及には多くの問題もある。今回の研修会は、現在の社会が問われている「生活の質」とエコツーリズム、エコツーリズムに大きな関わりを持つ博物館の役割を考えさせられ、また、旧校舎を利用した富良野市博物館、伝統のある大学演習林で現地研修の時間を持つことができた有益な2日間であった。

（北海道博物館協会理事 丹治輝一）



現地研修（東京大学北海道演習林）

石狩・後志・
空知地区
News

平成14年度の活動を通して

石狩・後志・空知地区博物館等連絡協議会（以下、道央ブロック）が設立して、5度目の春を迎えようとしている。56館・園から成る道央ブロックは、6月頃の役員会、総会、研修会、9月頃の現地研修会、そして、年3回の『MUSEUM ニュース』発行を主な活動としてきた。

平成14年度は、6月14日に札幌市博物館活動センターを会場に役員会、総会、研修会を、9月26日には木田金次郎美術館・西村計雄記念美術館を見学する現地研修会を実施した。いずれも参加者が多いとはいえ、どうしたものかと頭を悩ませている。

道央ブロックは、石狩、後志、空知3管内にまたがり、毛色の異なる館・園が集まる地区である。そんな中であって、研修会などの計画を立てるのだが、なかなか共通の話題で集うことが難しいのも現状である。テーマによって集まるメンバーが変わるのは致し方ないことなのだが、道博協を細

分化し、地域を意識した横の連携を図るための組織なので、垣根をはずした付き合いは出来ないものかと思案している。道博協の分科会と同じように、分野ごとの集いになるのでは、道央ブロックの存在意義が問われるところでもある。

さて、まもなく平成15年度を迎えるが、今年も例年通り、からは脱却したいものである。今秋には、小樽で開催予定の道博協の『ミュージアムマネジメント研修会』を、道央ブロックが主催することとなった。これを良い機会に新たな展開が起こるのではないかと、期待している。



9月26日の現地研修会より
(石狩・後志・空知地区博物館等連絡協議会
事務局員(北海道開拓の村 学芸員) 黒川 郁)

道南ブロック
News

道南に新たな展示施設「ピリカ旧石器文化館」がオープン予定

今金町では史跡ピリカ遺跡の保存整備事業計画を平成5年度より進めてきた。平成12年度からは国庫補助金を受け、具体的な史跡整備に着手することができ、平成14年度をもって整備事業を完了する。整備内容としては、ガイダンス施設（ピリカ旧石器文化館）と遺構露出保護展示施設（石器製作跡）の建設が大きな柱となっている。

ピリカ旧石器文化館は、遺跡に近接しており、重要文化財を含む出土品の展示、映像による遺跡の説明、石器づくりなどの体験学習の主に3つの機能を備えている。展示や映像をとおしてピリカに旧石器人たちはどのような道具を用い、厳しい氷河期を生き抜いたかを知ってもらうことをねらいとし、体験学習は学校教育の一環として活用されることを主眼としている。面積は287㎡と小規模であるが、旧石器時代を通して人間の歩みを振り返り、人間の持つ技術の素晴らしさを実感できるスケールの大きい情報発信拠点を目指している。

石器製作跡は、石器の出土状態を剥ぎ取り複製

により展示、発掘調査風景を再現し、発掘調査はどのように進められるか、発掘から何がわかったかを知ってもらうことをねらいとしている。面積は78㎡であり、発掘地点の原位置に設置した。

その他の整備として、石器製作跡に隣接して、花粉分析よりわかった当時生えていた針葉樹（グイマツ、アカエゾマツ）の植栽を行った。また、説明板、園路を設置した。

これらの施設を備えた史跡ピリカ遺跡は、平成15年5月以降のオープンを予定している。

(今金町教育委員会 寺崎康史)



道北地区
News

雪と粘土の熱い関係

名寄市北国博物館は、北国を冠するゆえ冬も野外事業に積極的に取り組むことと、地域の素材を事業に生かす事にこだわっている。

冬といえば雪である。道北地域内陸部は水分の少ないサラサラ雪が多く降る。降雪は時が経つとしまり雪となる。表層の雪を除いた積雪下部のしまり雪を角ブロック状に切り出す。その中央に筒状のもので穴を開け、その周囲の雪を適当な厚さを残して削り取ると雪の灯籠が出来る。中にローソクを入れ火を灯せば「スノーランタン」となる。アイスクャンドルが氷製ならこちらは雪製。名寄では冬の各種催しに多用され、館でも毎年屋外の灯りを眺めながらの雪あかりロビーコンサートを開催している。

地域素材のひとつは、館の建つ丘陵の粘土に注目した。キメが細かいその粘土は、開拓期にはレンガ、後には暗きょ排水用の陶土管の原料となっているが、ふだん人の目に触れない存在であるが、日常生活に生かせないかと考えた。土工工場より

焼成前の軟かい型押し粘土をわけてもらい、穴を開けたり切り取って加工する。自然乾燥後、工場の窯で焼成すると陶製ロウソク覆いの「ランプシェード」の完成となる。毎年クリスマス前に作り、だいたい色の陶管からこぼれるローソクの火が、冬に向かう時期の人々の心をなごませる。

雪がしまり堅くなるのも、粘土が焼き固まるのも、粒同士が温度上昇で結合する「焼結（しょうけつ）」という化学変化によるものという。雪と粘土とは一見、異なる素材だが同じ作用で変身し、館の普及活動に一役買っていたいでいる。



(名寄市北国博物館 学芸員 鈴木邦輝)

日胆地区
News

二風谷アイヌ文化博物館 展示リニューアル工事を実施

イランカラプテ。平取町立二風谷アイヌ文化博物館からです。昨春から進めてきた改装工事が終了しました。ご来館のうえ直接様子を見ていただくのが何よりですが、主な更新点をお知らせしますので、ご見学の予備知識としてください。

1. 玄関の扉

まず、玄関が変わりました「北海道遺産」アイヌ文様が刻印された金属プレートを埋め込んだ新しい木の扉は、遠目にもキラキラ豪華かつ重厚な雰囲気。中扉の方はガラスで明るくライトな感じに。これにもアイヌ文様を描いたシートが貼られていて少しオシャレな入口になりました。

2. 伝承サロンのディスプレイ

館内に入ってすぐのフロア、伝承サロンの壁面には大型のプラズマ・ディスプレイが二つ取り付けられました。展示誘導の案内番組（資料映像がとてもきれい）も準備しています。

3. 展示室のケース類

昨年に国の重要有形民俗文化財として指定されたたいせつな資料群を配置したケースや壁面は、ガラスをめぐらしてしっかり防護。でも、かえって見た目スッキリ。古い生活用具類の価値が高まり、輝きを増したかのようです。

4. ビデオステージ

ユーカラなどを鑑賞できる展示室中央の映像装置周辺もキラキラした感じに。玄関扉の金色に対し、こちらは銀色。シルバーのイナウ（御幣）やイヌンペ（炉縁）で飾り立てられています。

5. 情報提供

コンピューターを使って情報を提供する装置を展示室内に設置しました。また、サロンの壁には、横に長い歴史年表を作りました。新しい発見の話題なども随時盛り込める設計になっています。

6. 体験して学ぶ装置類

クマや、テンのような小動物、カケスなどの鳥を捕まえる仕掛けを体験できるようにしました。

また、アイヌ文様を描いてみるコーナーも。巧みな工夫、技を実感できるのではないのでしょうか。ご来館をお待ちしています。

(二風谷アイヌ文化博物館学芸員 吉原秀喜)

道東3管内
News

道東3管内博物館施設等連絡協議会 平成14年度 博物館交流推進会議報告

道東3管内博物館施設等連絡協議会の博物館交流推進会議を、十勝管内博物館学芸職員等協議会と共催で、10月3～4日に浦幌町教育文化センターを会場に「博物館と学校」をテーマに開催した。参加者は28名。1日目は博物館と学校の連携・博物館と子どもたちとの関わりについての基調講演と事例報告、2日目は浦幌町立博物館、豊頃町える夢館の施設見学を行った。

基調講演は苫小牧市勇武津資料館館長の佐藤一夫氏を講師に「博物館と学校」を題に、苫小牧市博物館の事例を中心にお話いただいた。とくに、資料・情報を持ち、専門職員がいる博物館が、学校・地域・家庭の三者との連携を視野に入れた活動の重要性が



説かれた。この実践例として、学・社融合で取り組んでいる展示学習・体験学習、一般を対象とした博物館大学、移動博物館、土曜ミュージアムをはじめとする多数の事業について、実施方法と問題点について紹介された。また、学校教育との連携では、校長会・教頭会の利用、教育研究所とのかかわりなどの具体例も提示され、すぐにでも自館で取り入れることが可能な分野もあり、興味深く講演に聞き入った。

事例報告では、岡庭義行氏（帯広大谷短期大学）をコーディネーターに、山宮克彦氏（中標津町郷土館）、小松芳幸氏（足寄動物化石博物館）、高橋勇人氏（釧路市立博物館）が、各館で取り組んでいる、地域の子どもたちを対象とした事業について、開催方法や問題点、今後の展望についての報告が行われた。

その後行われた交流会では、各館・園が抱える問題、とくに最近の行財政改革に伴う事業予算の縮小への対処などについて、情報の交換がなされ、有意義な時間を過ごすことができた。

（道東3管内博物館施設等連絡協議会事務局
北沢 実）

網走管内
News

網走管内博物館連絡協議会 平成14年度個別研修

10月5日に網走管内博物館連絡協議会個別研修が上湧別町ふるさと館JRYで行われ、10館より17名が参加しました。「今、困っている事は何ですか？」というテーマでの意見交換。管内博物館のお互いの問題点を知り、協議会本来の意味である相互支援を実現しようと意図したものです。事前に問題を出し、それを元に討論を行いました。

最初の課題は、「地域での博物館の果たす役割、位置づけが曖昧。」地域博物館の存在意義に関わる事なので最優先で取り上げました。社会教育の中での位置づけが全くなされていない館。発掘に多くの時間が費やされている館。各館の位置づけはまちまちでした。これに対しては「首長がどのような位置づけをするのかを明確にもらったほうがよい。」という提案がでました。


次は職員不足について。人手不足はどこの館でもほぼ同様。道立の館以外は、事務作業を兼務し、資料整理や研究調査などに手が回らないというのが実情です。これも同様に、行政に理解が必要で

あるという意見が多数。「何のために博物館を作ったのかを行政や一般に理解し支援してもらう体制作りが必要。」が集約的な意見でした。

そして、入館者数について。リニューアル館では年間2万人を想定、独立採算制の第3セクターの館は営業活動を展開して年間5万人が目標。教育普及に重点をおいたり、特別展示での入館者数に重点をおいたり、特別展示での入館者数増をメインにしたりもあります。「集客も重要ではあるが、本来の目的は伝承にあるのではないか。なぜなら我々は博物館なのだから。」という意見のように、単に入館者数を意識するのではなく、総合的な視野で活動を見ることが大切。

各館の最重要課題は、やはり博物館の専門職員、つまり学芸員不足でした。今回は、各館の実情や問題を相互に理解するきっかけとなりました。多くの課題は管内博物館に共通であり、拡大すれば日本の博物館の課題でもあります。そして、その解決には、地域の行政、住民の理解が不可欠であることを再確認できました。（研修要約報告書（中村名誉館長作）希望はjry@ohotoku26.or.jpまで）

（上湧別町ふるさと館JRY 学芸員 中島一之）


 学芸職員部会
News

学芸職員部会の動き

「鯨が開いた鎖国の扉」、利尻町で開催された学芸職員研修会は富田虎男立教大学名誉教授の基調講演から始まりました。鎖国政策をとっていた徳川政権時代に利尻島に上陸した、ラナルド・マグドナルドの世界観を豊富な資料をもとに解説。まさに、「利尻島から日本・世界が見える」にふさわしい講演でした。前日から利尻入りしていた人たちを除き、大半は当時のフェリーで到着しましたが、会場に入った参加者は一様に青い顔、風でうねりを増した波の洗礼を受けた様子。基調講演の後、「島という地域性—学芸員の目から—」山谷文人氏（利尻富士町教育委員会）、「礼文島から」藤島隆史氏（礼文町教育委員会）、「博物館と学校とのよりよい関係づくり」千葉登氏（利尻町立杵形中学校長）、「生涯学習を考えるときの博物館」中川原潔氏（利尻町社会教育委員長）、「利尻島から日本・世界が見える」西谷榮治氏（利尻町立博物

館）と盛りだくさんの話題提供がなされました。山谷氏の発表にありました島全体が博物館という発想は、その土地の個性を拓いてゆく上で大切なことではないでしょうか。

例年より早い時期に開催された研修会、以後、主だった活動は行っておりませんが、昨年11月に全会員に向けて、部会発会25周年記念誌への原稿依頼を行ない、現在編集作業に取りかかっていますが、原稿の集約が50パーセント強という状況であります。編集に携わっている方たちに焦燥感がひしひしと伝わってくるこの頃、15年度の研修会までには何とか完成させたいものです。私達も使え、地域の人達も使える記念誌を目指しております。会員一人一人の専門分野からの情報発信、特色ある博物館活動、調査活動などが掲載された記念誌はきっと、多くの人たちに活用されることでしょう。

小さな学校の3・4年生が動物を調べにやってきました。帰る時間が告げられるとこどもたちは「もっと居たい」と、至福の一時でした。

（学芸職員部会 矢吹俊男）


 動物園・水族館
News

駅前食堂の味

よく調査モノのアンケートで、記入者の専門分野を書く欄がある。記載例には“物理系”“化学系”などあるが、苦笑することはしょっちゅうだ。あえて書くなら“よろず系”と書くしかないからだ。私は学芸員ではない。昨年3月までの職場は市役所の税務課であり、その前は福祉課だった。

科学に無縁だった私が、子どもたちの前で実験をしている。工作も教えている。加えてこども科学館のほかに美術自然史館、郷土館も兼務だから化石収集にも行くし、郷土館に資料寄贈の申し出があればいただきに伺う。もちろん屈強な学芸員はいる。3館でひとり(!)だが…。本来なら、一館にひとりづつ学芸員が配置されてしかるべきなのであろうが、財政難の折そうもいかず、ひとり任された彼の守備範囲は気が遠くなるほど広大だ。そんな学芸員のバックアップの仕事だが“よろず系”ということになるかもしれない。

滝川こども科学館は館名に“こども”とあり、子どもたちに身近な科学に触れてもらい、「不思議だなあ」と感じるきっかけを提供できれ

ばと考えている。動く地球儀「プレート・テクトニクス」などの大きな展示物もあるが、手先の器用な前出の学芸員と熱意あふれる科学館の指導員が、ペットボトルや牛乳パックなどのリサイクル素材を利用して作った展示物も揃っている。

このように、確かにこども科学館は科学館と称しながら私のような“よろず系”がいたり、手作りの展示品があったり、人材面でも設備面でもおよそ“科学的”ではない部分が多々ある。しかし当館のようにごく限られた人員で、高度な科学の普及事業などを展開するのは困難と言わざるを得ない。“アカデミック”な味を出すには、どうしても無理がある。言い換えるなら、フランス料理や中華料理などの専門レストランにはなり得ないのである。それであれば、ここは美術自然史館や郷土館も含めた“よろずメニュー”がそろって昔懐かしい駅前食堂の味で勝負か。従業員はひとり何役もこなさなくてはいけないが、何かしらお客さんに届くものがあるのではないだろうか。

（滝川市こども科学館 小山 淳）

新館オープン

中川町エコミュージアムセンター

◇オープンまで

世界有数のアンモナイトの産地として知られる中川町では、1973年と1991年にクビナガリュウ化石が発見され「化石博物館をつくろう」という機運が盛り上がり、1997年に「化石の里づくり推進室」が設置され、地域調査・研究活動が進められてきました。この活動のなかで、中川町には化石以外にも多くの有形無形の自然・文化・生活財産があることが明らかとなり、化石だけにとらわれず、様々な地域特性・財産を地域の魅力としてとらえ、町全体を博物館とみなしてまちづくりを進めていく「エコミュージアム構想」が1999年にスタートしました。2002年7月には、そのコア施設である自然誌博物館／宿泊型体験・研修複合施設の「中川町エコミュージアムセンター」がオープンしました。この施設は、廃校となった旧佐久中学校を全面改装したもので 1) 学術情報発信の場、2) 学びと交流の場、3) 地域住民のまちづくり参画の場、として設置されました。

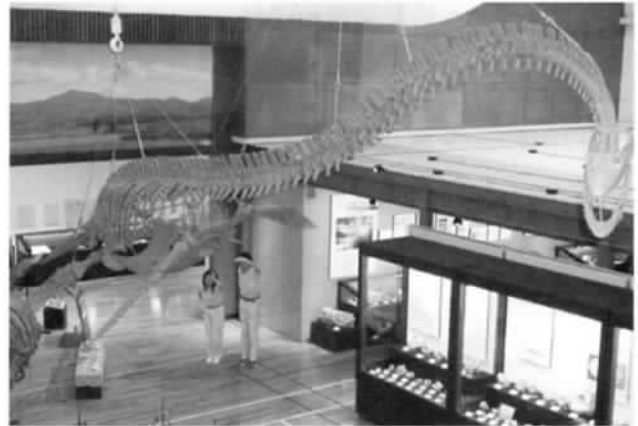


中川町エコミュージアムセンター全景

◇展示

旧体育館部分が「自然誌博物館」として生まれ変わりました。入ってすぐに目に付くのはその床です。卒業生をはじめとして地元の人々の「なるべく学校の面影を残して欲しい」という要望で体育館当時のまま残しています。「図説・地球の歴史—金子三蔵画伯の世界—」では、湊・井尻（1967）の「図説・地球の歴史」の16枚挿絵の原画とそれぞれの時代の化石を展示し、46億年にわたる地球ドラマを駆け足で紹介しています。メイン展示の「中川が海だったころ」では、国内最大全長11mのクビナガリュウやアンモナイトなど町内の様々な化石を展示し、当時の中川の様子につい

て解説しています。一方、町の85%を占める森林については「中川の森の自然誌」で、アカエゾマツをはじめとする巨木の標本を展示し、気候や土壌に対応し移り変わってきた森林の様子を化石記録と現在の中川の森林から解説しています。これら展示は、展示ケースやパネル類など全て手作りかつ可動式なので、最新の学説や調査・研究の成果をふまえた展示替えが容易に行えます。



国内最大のクビナガリュウ(愛称;NaQoo「ナクウ」)

◇宿泊研修施設

旧校舎部分は宿泊・研修施設となり、教室は約100名収容の視聴覚室、宿泊室（4部屋+2和室；最大60名収容）、大小の浴室、クリーニング室、研修室などに生まれ変わりました。宿泊研修の時には、町民ボランティアが賄いや掃除に訪れます。当センターでは、地元の方々に地域研究や普及事業にとどまらず、その管理運営にもご協力いただいているのです。これがキッカケとなり、町外の宿泊研修者と町民との交流がはじまりつつあります。今後、「中川エコミュージアム」という広大なフィールドミュージアムの“展示活動”のためには、当センターを中心として、ますます町内外の人の輪を大きくしていかなければなりません。

所在地：中川郡中川町字安川28-9

TEL01656-8-5133/FAX01656-8-5134

E-mail：kubinaga@hokkai.or.jp

URL：http://city.hokkai.or.jp/~kubinaga

観覧料：一般200円（団体10名以上150円）、高校生以下および70歳以上は無料。

休館日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始（12/29～1/7）

開館時間：9：30～16：30

（中川町エコミュージアムセンター

主任研究員 足田 吉識）

事務局日誌

平成14年

- 10月24日 ・ 第2回役員会開催（富良野市）
- 10月31日 ・ 北海道立青函トンネル記念館退会（団体会員）
- 11月13日 ・ 石狩・後志・空知地区連絡協議会へ活動助成金送付
- 11月13日 ・ 第2回役員会議事録・第41回博物館大会報告書の送付
- 11月15日 ・ 平成15年度北海道博物館協会表彰申請関係書類の発送
- 11月22日 ・ 平成14年度加盟館園等現況調査の発送
- 11月22日 ・ 網走管内博物館等連絡協議会へ活動助成金送付
- 11月29日 ・ 泊村鯉御殿入会（団体会員）
- 12月4日 ・ 道教委より北海道立道民活動センター使用料減額対象団体である当会に対し調査依頼、活動団体調書を返送
- 12月25日 ・ 同日付で利尻町立博物館より、表彰候補者として利尻町立博物館協議会長、金田幹男氏を申請

平成15年

- 1月7日 ・ 風連町歴史民俗資料館より年度末を以て退会との申し出（団体会員）
- 1月10日 ・ 同日付で仙台藩白老元陣屋資料館より表彰候補者として同館友の会を申請
- 1月21日 ・ 瀬棚町郷土館より年度末を以て退会との申し出（団体会員）
- 1月24日 ・ 平成15年度ミュージアムマネジメント研修会の打ち合わせ（開拓の村）
- 1月25日 ・ 第77号道博協ニュース原稿執筆依頼
- 1月27日 ・ 滝上町郷土館より年度末を以て退会との申し出（団体会員）
- 2月12日 ・ 平成14年度第3回役員会の開催通知を送付
- 2月14日 ・ 平成15年度の主な展示会及び普及事業計画の調査用紙発送
- 2月18日 ・ 平成14年度加盟館園等現況を発注
- 2月21日 ・ 平成15年北海道博物館協会表彰へ申請のあった2件の関係書類を表

彰担当役員に送付（後日電話にて表彰の可否を確認）

- 2月21日 ・ 道東3管内博物館施設等連絡協議会へ活動助成金送付
- 3月6日 ・ 第77号道博協ニュースを発注
- 3月27日 ・ 平成14年度第3回役員会を開催

新入会員の紹介

平成14年度次の団体と個人が新たに会員となりましたのでお知らせします。

団体会員 鯉御殿とまり（泊村）

個人会員 金山喜昭氏（千葉県野田市）

平成14年度次の団体会員が退会されましたのでお知らせします。

団体会員 北海道立青函トンネル記念館

役員異動

人事異動等により、次のとおり役員の変更がありました。

副会長 佐々木 克弘氏（帯広百年記念館長）

事務局からのお知らせ

平成15年度北海道博物館大会は平成15年7月10日、11日の両日、枝幸町の枝幸町中央コミュニティセンターを会場として開催することになりました。大会テーマ、シンポジウム等につきましては只今検討中ですが、詳しくは「道博協ニュース」第78号でお知らせします。数多くの参加をお願いいたします。

会費納入のお願い

多くの会員からは平成14年度の会費を納入していただいております。しかし、平成13年度及び平成14年度の会費をまだ納入されていない会員がおられます。北海道博物館協会の事業は会員から納入されます会費で運営しておりますので速やかな納入をお願いいたします。

主な展示会及び普及事業に関する調査についての協力をお願い

平成15年度の各館・園の主な展示会と普及事業に関する調査を行います。各館・園に調査票をお送りしておりますので、皆さまのご協力をお願いいたします。